

鎌倉市二階堂

史跡永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備
事業に係る試掘調査報告書

— 昭和 56 年度 —

昭和 57 年 2 月

史跡永福寺跡試掘調査団編
鎌倉市教育委員会発行

序 文

鎌倉市教育委員会

教育長 尾 崎 實

国指定史跡永福寺跡は、源頼朝によって創建された大寺院です。記録によれば苑池を中心とした美しい庭園と、二階堂、阿弥陀堂、薬師堂の三堂を始めとした壮大な伽藍が建ち並ぶ大変美しいお寺であったと伝えられています。

鎌倉市では由緒ある永福寺跡を調査・整備し、史跡公園として広く市民に活用していただくことを基本計画で決めました。このため、現在までに約86,000㎡の指定地の内、45,360㎡ほどを国・県の補助を受けて公有地化しております。

さらに市では整備事業計画を具体化するために、今年度、貫達人先生を会長とする「史跡永福寺跡整備計画準備委員会」を設置し、様々な角度から史跡整備事業の実施方法を検討いたしました。このたび行なわれました試掘調査は、より確実な検討資料を得る目的で実施されたものです。試掘調査で得られた多くの貴重な成果の詳細は本報告書の中に記され、また整備事業実施に際しての具体的な問題点に関する提言もいただきました。今後はこれらを拠りどころにして、なお検討や調査を加え、本格的な整備事業の着手に向けて準備をすすめる所存です。

なお調査に際しては、準備委員会の諸先生方及び文化庁、県等の関係機関の方々から適切なお指導をいただきました。また厳冬期にもかかわらず調査を遂行された、大三輪龍彦氏（鶴見大学助教授・鎌倉考古学研究所長）を始めとする調査団の皆さんや、調査にご協力いただいた近隣住民の方々に末尾ながら深く感謝申し上げます。

例 言

1. 本報告書は、神奈川県鎌倉市二階堂所在国指定史跡永福寺跡の環境整備事業に係る、国庫補助及び県費補助で実施された試掘調査の結果をまとめたものである。
2. 試掘調査は鎌倉市より委託を受けて、史跡永福寺跡試掘調査団（団長大三輪龍彦）が実施した。また調査団は実施にあたって、鎌倉市教育委員会及び史跡永福寺跡整備計画準備委員会より指導と助言を受けた。
3. 試掘調査団の構成は、本頁下にこれを示した。
4. 本書の執筆は下記のごとく分担した。

第 1, 3, 5 章及び第 4 章(1)	河野真知郎
第 2 章	馬淵和雄
第 4 章(2)及び(3)	原 広志
結語	大三輪龍彦
5. 本書に使用した写真は、遺構、遺物ともに木村美代治が撮影した。
6. 試掘調査中の現地では、下記の方々より貴重な御教示を受けた。

赤星直忠氏、小川裕久氏、金丸義一氏、
手塚直樹氏、吉岡幹幸氏。

また附近の住民の多くの方々より、物心両面にわたる御支援を受けたことを記して謝したい。

試掘調査団構成

団長	大三輪龍彦
調査主任	河野真知郎
調査員	馬淵和雄、原広志
調査補助員	岡山仁、福田誠、後藤典幸、浜口康
カメラマン	木村美代治
発掘協力者	庄子望、宗台秀明、小原浩一、山川 倫世、増島孝夫、武淳一

目 次

本 文 目 次

序 文	(i)
例 言	(ii)
第1章 位置と環境, 沿革	(1)
第2章 試掘調査の経過	(3)
第3章 試掘トレンチ各説	(5)
(1) 第1 トレンチ	(5)
(2) 第2 トレンチ	(7)
(3) 第3 トレンチ	(7)
(4) 第4 トレンチ	(8)
(5) 第5 トレンチ	(9)
(6) 第6 トレンチ	(11)
第4章 出土遺物	(13)
(1) 陶磁器	(13)
(2) 瓦 類	(15)
(3) 動物戯画のある瓦片	(20)
第5章 問題点の整理	(22)
(1) 塔跡推定地について	(22)
(2) 苑池について	(22)
(3) 建築遺構について	(23)
(4) 環境整備に向けて	(24)
結 語	(25)
史跡永福寺跡整備計画準備委員会委員名簿	(26)

挿 図 目 次

Fig. 1 永福寺跡位置図	(2)
Fig. 2 試掘トレンチ位置図	(4)
Fig. 3 第1 トレンチ平面及び断面図	(6)
Fig. 4 第2 トレンチ平面及び断面図	(7)
Fig. 5 第3 トレンチ平面及び断面図	(8)
Fig. 6 第4 トレンチ平面及び断面図	(9)

Fig. 7	第5 トレンチ平面及び断面図	(10)
Fig. 8	第6 トレンチ平面及び断面図	(12)
Fig. 9	出土遺物 (1) 陶磁器	(13)
Fig.10	出土遺物 (2) 鎧瓦・宇瓦	(16)
Fig.11	出土遺物 (3) 女瓦・男瓦	(18)
Fig.12	出土遺物 (4) 文字瓦・戯画のある瓦片	(20)
Fig.13	池底レベル模式対比図	(22)
Fig.14	遺構推定地と埋没深度	(23)

図 版 目 次

PL. 1-1	東側山中より永福寺跡を望む
-2	第1 B トレンチ地業層中出土の宇瓦
PL. 2-1	第1 A・B トレンチ第1面
-2	第1 C トレンチ第1面
-3	第1 B トレンチ東端傾斜版築層
PL. 3-1	第1 D トレンチ
-2	第1 E トレンチ (西方より)
-3	第1 E トレンチ (南方より)
PL. 4-1	第2 トレンチ
-2	第3 トレンチ
PL. 5-1	第4 A・B トレンチ
-2	第4 C トレンチ
PL. 6-1	第5 トレンチ (東方より)
-2	第5 トレンチ (北方より)
PL. 7-1	第6 トレンチ全景
-2	第6 トレンチ中央部に検出された礎石, 根石, 抜きとり穴
-3	第6 トレンチ北壁の土層断面
PL. 8	出土遺物

第1章 位置と環境, 沿革

永福寺跡は国鉄鎌倉駅の東北方約1.8kmの谷あい^あに位置しており、現在の町名「二階堂」、また小字名に「三堂」「四ツ石」といった関連呼称をとどめている。現在の道筋では、荏柄天神前を通り、鎌倉宮の南を抜けて、瑞泉寺へ向かう道の北方にひろがる平坦地ということになる。

南をのぞく三方は山に囲まれた地で、鎌倉の多くの寺がそうであるように、「谷」の中にある。しかし「三堂」の地名を残すあたりは、西ケ谷・亀ヶ淵の両谷が合流し谷幅は広がり、ほぼ東西100m前後、南北200m以上の平坦地になっている。南方の谷開口部東には「護良親王墓」のある山が突出しており、永福寺跡に立って周囲の山を見渡すと現在なお幽玄の趣を味わえる。

永福寺は源頼朝の御願寺であり、奥州攻めに際して見聞した平泉の精舎を模して建立したといわれる。文治5（1189）年12月を事始とし、建久3（1192）年11月に永福寺供養をしている。翌々年までには境内の堂舎は揃ったようである。

永福寺には、二階堂（永福寺）、阿弥陀堂、薬師堂の中心伽藍があり（「三堂」）、各堂それぞれが一寺として扱われ三人の奉行人が置かれていた。その他に釣殿、多宝塔、鐘楼、総門、南門、別当坊、僧坊などがあつたとされる。永福寺の特徴としては、創建時から庭園に強い関心が払われ、頼朝自身が造成現場を訪れて作庭家に指示したりしており、相当規模の庭園があつたことが知られる。

永福寺は何回かの火災を受け再建されたりしているが、寛元・宝治年間（1243～1248）には特に大規模な修造が加えられたことが知られている。また元弘の乱以降も鎌倉公方（足利氏）の保護を受けたりしているが、応永12（1405）年焼失後は再建されず、15世紀中頃には廃寺となった。

永福寺跡からは古瓦類が採集され、古くからここに寺跡の存することは知られていた。昭和8年に三堂南方に鉱泉旅館が建てられて周辺の土取りが行なわれ、その際赤星直忠氏等が調査を行なって、中ノ島や池中の立石などを確認され、永福寺の伽藍配置についてもかなり進んだ推定がなされた。さらに昭和28年には赤星氏により永福寺推定堂跡に発掘のトレンチが入れられ、礎石の多くは大塔宮建立のさい運び去られた（伝承）らしいが、礎石下地業の存在により堂の規模もわかってきた。

この遺跡の重要性から、昭和28年12月、主要伽藍のあつた平坦地を中心に、神奈川県が史跡指定した。その後昭和40年頃から、永福寺僧坊跡と推定されていた西ケ谷に宅地造成工事が行なわれ、それに伴う発掘調査が実施されて建築遺構等が検出された。そして昭和41年6月には、周囲の景観も含めた範囲で国指定の史跡とされ、昭和42年度以降には土地の買収が続行されてきた。

上述の堂前池・二階堂・西ケ谷僧坊址の他に、亀ヶ淵やぐら群、鐘楼跡などについても調査が行なわれているものの、広大な寺域に対し調査された面積はあまりに少く、今年度は環境整備事業のための試掘調査が実施される運びとなったのである。



Fig. 1 永福寺跡位置図 (太線囲みは史跡指定範囲)

第2章 調査の経過

今回の試掘調査は史跡環境整備に係るものであり、全般的には遺構の所在とその埋没深度の掌握を目的とし、かつ遺構の保存という観点からこれを傷つけぬようにも配慮した。その結果、検出遺構の規模や性格を判断する材料としては、いささか不満足な段階で発掘を止めざるを得ない部分もあった。

試掘に入るにあたっては、将来の大きな調査のさいに遺構位置等を総合しうるように、遺跡地に大きな測量方眼を設定した。方眼は塔跡推定地北西方に基準杭A-1を定め、磁北方向を主軸とし、南北方向軸には東に向けてアラビア数字を、東西方向の軸線にはアルファベットを20m間隔で付した。各方眼（グリッド）の名称は、その北西角にある杭の名称で表示される。

試掘は昭和56年12月5日より開始された。

試掘トレンチは以下のように設定した。

▷第1トレンチは、塔跡推定地における遺構確認を目標として、A・B-1グリッド中に、台状地形の中央を横断する第1A・Bトレンチ（2m幅、長さ22m）とこれに直交する1Cトレンチ（幅2m、長さ9m）とした。後に版築層確認のため1D（1×4m）と1E（1×5m）の2本のトレンチを追加した。

▷第2・3トレンチは苑池の北と東の汀線を確認するため、それぞれの推定地に入れた。第2トレンチは2×4mのものを、西壁を方眼の5ラインにのせて設定。第3トレンチはF-6グリッドに後世盛土と電柱を避けて1.2×6mのものを、東西方向に近づくように設定した。

▷第4トレンチは中ノ島とその周囲の池底を見るために、島の中央を横断する4A・Bトレンチ（1×10m）と、島岸の遺存の良好な南側に4Cトレンチ（1×4m）とを設定した。

▷第5トレンチは釣殿推定地からその前面の池中にかけて3×10mのものを、南壁をIラインにのせるように設定した。後に礎石を追究するため南方へ小拡張を行なった。

▷第6トレンチは三堂の薬師堂推定地から前面の池中にかかるように、3×20mに2×5mをつなぎ北壁がEラインにのるように東西に設定。しかし後述するように、このトレンチでは確たる建築遺構や汀線も検出されず、また予想外に深く湧水も甚しく、発掘は難行した。

第1トレンチ以外は旧水田地下に当たるため、発掘中は水中ポンプで排水しつつ掘り進めたが、写真撮影のための清掃も困難をきわめた。第6トレンチでは土層断面図作製後に砂層の一部に崩落があり、今後の調査時には湧水対策が重要であることを痛感した。

昭和57年1月14日までに、各トレンチの精査、写真撮影、実測など必要な作業を終了し、1月15日に機材を撤収し現地調査を終了した。

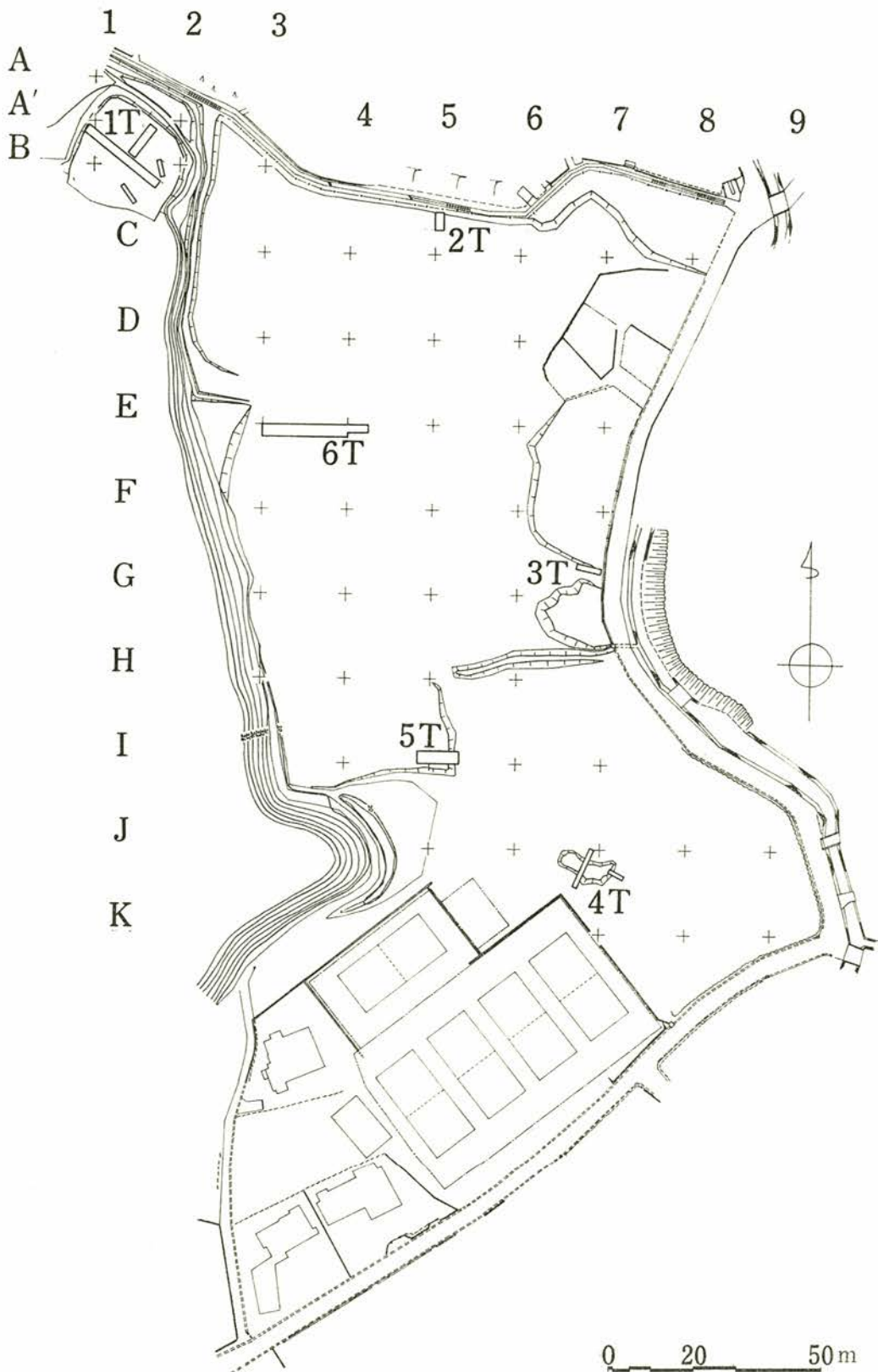


Fig. 2 試掘トレンチ位置図 (現況図・区画方眼図内におとす)

第3章 試掘トレンチ各説

(1) 第1トレンチ (Fig. 3)

西ガ谷への入口にあたる南側の小高い平坦地は、幅25m奥行き22mほどの長方形の平面で、三堂の推定地である旧水田面より5mほど高くなっており、従来「塔跡」推定地とされていた。そこで試掘トレンチはこの台地の中央を北西—南東に横切る1A、1Bの2本（後に1本につなげた）と、この中央部から北東へ直交するような1Cを、設定した。

台地上は平均20cmほどの表土（旧畑土）に覆われており、表土を除去するとすぐに、土丹を砕いて敷き固めた地業面に達した（第1面）。この面は1Aトレンチ西端、1Cトレンチ北端では、地形なりにゆるく下降するが、台地中央部では平坦である。部分的に耕作によって攪乱されてはいたが、逆に厚さ数センチの遺物包含層を残す部分もあった。第1面の地業は厚さ30~40cmで、下部ほど大型の土丹塊が多く、上部では黒土まじりの細かい土丹粒となる。第1面では、1Aトレンチ西端近くで、隅丸方形（60cm×50cm、深さ15cm）の土壙が1口と、その西方に不確実なピット1個が検出されたほかには、遺構は見当らなかつた。遺物も少量のかわらけ片、常滑片、瀬戸片（縁釉小皿と思われる）、磨滅した瓦片が見られたのみで、図示するに耐えるものはなかつた。

第1面からのボーリング探査でさらに下に地業面の存在が予想されたので、1Aトレンチ西端、1Cトレンチ南端（台地中央）と北端を、限定した部分で深掘りしてみた。その結果、1面下40ないし80cmで良好な地業面を検出した（第2面）。この面の上には、第1面の地業層との間に、台地中央で5cm内外、台端で厚くなるチョコレート色の間層が存在したが、若干量の玉石が散在する他には遺物は見られなかつた。1Cトレンチ北端ではこの間層中にも大型の土丹塊が混入しており、またレベル的にも台地縁辺に向って下降するもので、第2面も塔跡と考えられるほどの地業とは考え難い。この第2面の地業層の厚さを見るために1Cトレンチ南端を掘り下げてみたが、50cm以上にわたって土丹塊が詰められているだけで、基底面は確認するに至らなかつた。

ところで、1Bトレンチの東端においては、第1面が台地の傾斜にかかる以前に途切れてしまい、暗褐色の固い土が表土下に見られた。そこで1Bトレンチの南半を半分の幅で掘り下げると共に、東端でも2mの範囲で深掘りを試みた。東端の深掘りは地表下2.5mにまで達したが、その間の土層は一定の傾斜をもった暗褐色土層（土丹粒の含み方や色調が異なる）群がつづき、一種の「版築」であることがわかった（傾斜版築層と呼称）。そして、1Bトレンチ南半の精査からすると、傾斜版築層は北々西方向に傾いていて、しかも上面は耕作により（あるいはそれ以前に）削平されており、版築の中心を推定すると現在ある台状地形の南端にずれてしまう。この傾斜版築層中には瓦片が混入して検出されたが、永福寺創建時とされるものではなく、Fig. 10—4に図示したものである。また同層中の深さ1.2mほどの所からは、Fig. 12—3に図示した動物画を朱描した瓦

片が出土した。

傾斜版築層が平面的にいかなるプランを有するかを確認するために、1Bトレンチの東西両側に細い1D、1Eトレンチを設定した。その結果、多少のズレはあるものの西南西—東北東のラインがつかめ、版築は北々西へと傾斜していることが確認できた。しかも、1Eトレンチにおいては傾斜版築層の最上面の斜面に、拳大～人頭大の土丹を貼りつけた遺構が検出された。

第1・2面と傾斜版築層の関係を見るに、この台状地形の南側にまず傾斜版築がなされ、その後第2面がこれに寄せかけるように北側に積み築かれ、次いで第1面が第2面上に積まれたものと解することができる。しかも傾斜版築は永福寺創建当初から存在したものでないことは、遺物上からも明らかで、また何故にこのような傾斜をもって版築がなされたのかという疑問が新たに生じるのである。

(2) 第2トレンチ (Fig. 4)

苑池の北側汀線を確認するために、B-5区西端に入れた2×4mのトレンチである。黒褐色の現表土以下は暗青灰色の粘質土で、すぐに湧水を見る。この土層は硬さで上下二枚に分層できるが、いずれも近世以降の水田耕土と考えられる。

現地表より、トレンチ北端では70cm、南端では45cmの深さで、玉砂利が多く乗る青灰色砂質土にいたる。これは第6トレンチに見られた地山に相当するが、やや固く色は黒っぽい。トレンチ北西角近くに一辺60cmほどの平たい安山岩が見られた。地山中に半ば埋没しており、周囲には同様の石は見られないものの、ここが苑池の北側汀線に近いと思われる。地山面もこの石の周辺では、南側に比して5cmほどだが高くなっており、汀線が現公道下あたりにあるものと推定して誤りなからう。

池底の標高は、トレンチ南端部で19m45cm前後にあり、他のトレンチと比較すると高い。

地山上の玉砂利に混じるような形で、若干量の瓦片が出土しているが、その中には「永福寺」銘スタンプの捺された女瓦片も含まれている。

(3) 第3トレンチ (Fig. 5)

苑池の東側汀線を確認するためF-6区に設定した東西方向のトレンチである。この周辺には最近の客土があって発掘に適す場所が少なく、やむを得ず電柱そばの凹地にトレンチを入れた。

部分的な客土と表土を除去すると、旧水田の水路と考えられる木杭や土留め板が多く姿を現した。これらはさほど古い木でなく、かつ赤星直忠氏の御教示からかつてそのような杭がこの辺の水田には沢山あったとのことで、それを除去しつつ以下の発掘を進めた。トレンチ東端ではそれ以外に

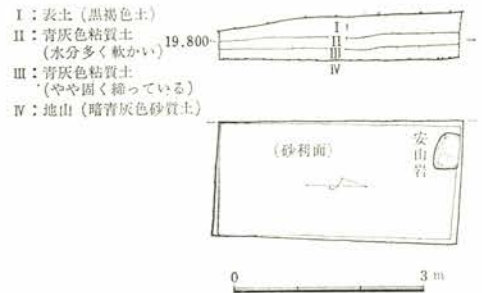


Fig. 4 第2トレンチ平面及び断面図

も旧路肩と思われる地業面や、地境標柱の花崗岩角柱もあり、後世の攪乱がかなり深くまで達していた。

トレンチ東側では地表下60cm、西端では85cmほどのところで、玉石が多く乗る土丹地業面を検出した。この面はトレンチ東部では高く水平だが、西方へ20cmほどの段を下り、さらにゆるやかに傾斜して行く。東部の水平部分では地業は固いが、

下降する西方ではやや軟弱となり、トレンチ西端には安山岩が据えられている。遺物は上部の攪乱層と耕土中よりゴミの類が出た他には、中世のものは見られなかった。

このトレンチの東1/3ほどのところにある緩い段は、かつての苑池の汀線と考えられ、西端の安山岩は池中の石と考えられる。ここで最深の池底標高は18m65cmほどになる。

(4) 第4 トレンチ (Fig. 6)

J-6, 7区に現在も小高く残る「中ノ島」について、4A~4Cの3本のトレンチを入れた。島を南北に横断するように入れたA, Bトレンチは後に一本につなげた。

4A, B両トレンチとも、池に入ってしまうと思われる部分では、地表から15ないし20cmで玉砂利の散乱する地業面に当たる。これはこの一帯がかつて鉱泉旅館建設のさいに土取りされたためと考えられる。4Aトレンチにおいては、現地表に残る段差の地下より、地業面の緩やかな段差が検出された。4Bトレンチにおいては、それに相当する部分には、土丹あるいは鎌倉石が斜面にそって並べられている。石の中には原位置を動いているのではないかと疑われるものもあるが、このトレンチ部分における中ノ島の範囲は、不変であったと考えてよからう。

中ノ島の水上部分については、現在残る小高い部分は積み直されたものである可能性が高い。4A・Bトレンチの土層断面には、玉砂利を散らす土丹地業面(中ノ島の構築基礎層か)のやや上に、宝永の火山灰と思われる黒色砂粒のブロックが認められ、近世においてそのレベルまで島の上部が削平されていたと推定されるのである。

4Bトレンチの東壁にかかるように顔を出した土丹は、きわめて大きな板石であり、またその東側には細長い石が転がっており、中ノ島の旧姿を考える上で橋の存在を思わせる材料になるかもしれない。

池底の標高は、4Aトレンチ北端で17m90cm、4Bトレンチ南端では18m弱ほどとなる。

4Cトレンチは島の東端に東西に入れたが、池の中に当る所ではやはり15~20cmの表土の下で、玉石の散る池底に当たる。しかしこの表土中には、最近の石材なども見られ、土取り時に池底まで削平されたことは明らかである。島の周囲にあったと思われる巨岩は、その根部が、池底に連なる土丹地業層中に入っており、位置は動かされていないものと考えられる。しかし石の裏側(島の高ま

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| I: 客土(黄色の砂) | V: 灰褐色土(稀質で土丹・玉砂利を含む) |
| II: 表土(灰褐色粘質土) | VI: 暗黄灰褐色粘質土(土丹を含む) |
| III: 旧路肩(褐色土で玉砂利含む) | VII: 土丹地業層(玉砂利を上面にのせる) |
| IV: 青灰色土(土丹を含み固い、玉砂利入り) | |

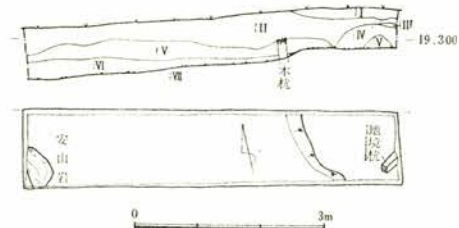


Fig. 5 第3トレンチ平面及び断面図

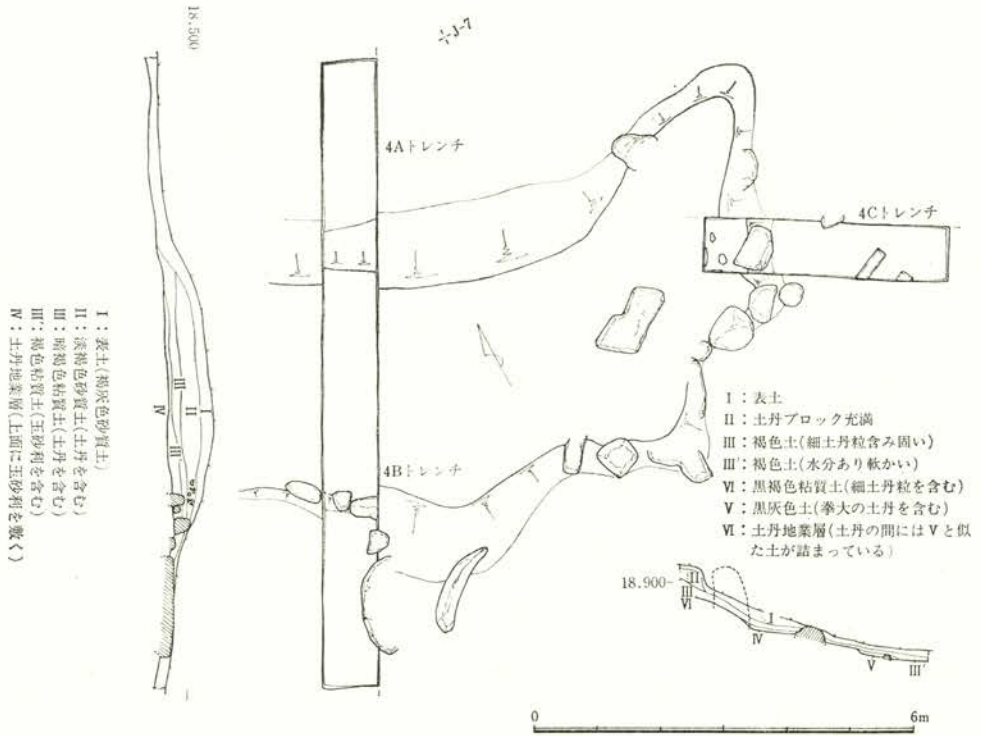


Fig. 6 第4トレンチ平面及び断面図

り)では、深さ30cmくらいまではグズグズの土丹混りの土が乗っており、近時に積み直されたものである。その分を差し引いても、中ノ島の頂部の高さは標高19mを超えると推定され、4Cトレンチ東端の池底レベル17m80cmとは、1.2mほどの差をもつこととなる。

(5) 第5トレンチ

三堂推定地の南東に当るI-5杭周辺は、東側の旧水田面より一段高くなっており、高まりの南と東の落ちぎわには巨石列が残っていた。そこでこの部分の高位部から低位部にかけて3m幅、長さ10mのトレンチを東西方向に入れた。

高位部では現地地表下45cm内外で、細かい玉砂利をのせる土丹地業面に当たった。この地業面上に堆積する黒褐色系の土は、玉砂利や瓦片、土丹粒を含んではいるが、畑の耕作土であったため植物の根がはびこっており掘りにくかった。地業面の状態を見るために、高位部北東隅に狭小なサブ・トレンチを入れてみたところ、上部10~15cmは細かい土丹粒と黒色土をまぜてつき固めてあるが、その下は大型の土丹をやや厚く積んだものと判明した。

第5トレンチ南壁のI-5杭より東3mほどの所で、壁にかかって伊豆石の礎石の一部が顔を見せていたので、その部分を幅60cmほど南方へ掘り広げて礎石の全容を見た。径70~90cmの楕円形の石で、高さは地業面から20cmほどある。火熱を受けたものか、石の表面は剝落していて滑らかではない。この礎石に関連する石はないかとボーリング棒で周囲をさぐったところ、その西2mほどの

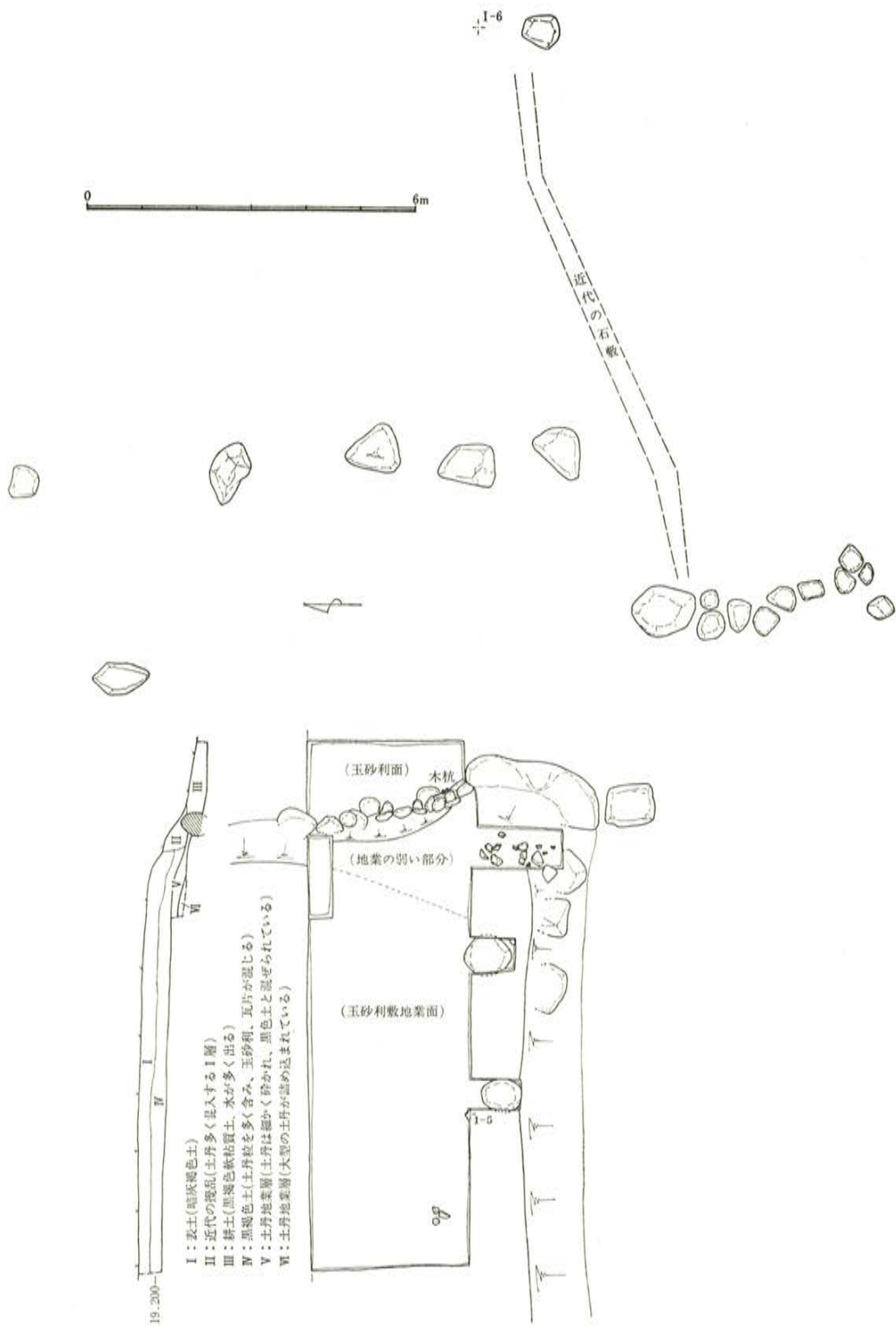


Fig. 7 第5トレンチ平面及び断面図(附; 東方釣殿礎石群)

I-5 杭すぐ東下に当りをみたため、50cmほどの幅で南へ掘り広げた。こちらの礎石は径60~70の卵形で面の上に18cmほどの高さで出ている。石の表面にはやはり剝落痕が認められた。これら2個の礎石には柱座の加工は認められない（剝落してしまったか）が、心々距離は265cmで約9尺に近い。しかしI-5 杭より西方ではボーリング棒に当りはなく、最初の礎石の東方に当たったものは掘り広げたところ砕けた伊豆石片と瓦片の群であった。

高位部の地業面は東に向かってゆるく傾斜し、しかもやや軟弱になる。トレンチ南北で汀線と思われる巨石の並ぶラインにあたる場所では、トレンチ内にかかったのは人頭大の扁平円形の伊豆石を乱雑に積んだ汀線であった。石の間には黒土や草の根が入り込み、石の固定もゆるい。また一部には芯のしっかりした木杭によって石が留められているところもあり、トレンチにかかった汀線は旧来の位置を変更されてはいないものの、近年の積み直しの可能性が高い。

第5 トレンチでは表土・耕土層から近世遺物が少量出土した他、Fig. 9-1 に図示した舶載白磁碗破片が出土した。また地業面の東に下降するあたりや、礎石を追って南方へ掘り広げた部分からは若干量の瓦片が出土している。

今回の試掘ではトレンチにかけなかったが、第5 トレンチの東方5 mほどの池の中にあたる位置には、ほぼ南北に並んだ5個の礎石らしい大石が認められる。またその列から離れたところにも合計4個ほどの石が池中に散在する。これらの礎石の配列はいかにも乱雑で、なかには人が乗るとグラグラするものもあって、後世の耕作や人為によって原位置を動かされている可能性が高い。しかしこの範囲にこれだけの石が集中的に存在し、しかもある程度列をなしていることは、ここに釣殿があったことを推定させるものである。今回の試掘で新たに出た2個の礎石とこれらの石とは並びの方向も合致しないが、より広い範囲を調査し他の残る礎石（あるいはその残痕でも）をさがし出せば、釣殿の規模を復原することも可能となろう。

なお、第5 トレンチ東端にかかった池底の標高は18m25cm程である。

(6) 第6 トレンチ (Fig. 8)

三堂推定地のやや北方で、旧畑地から水田に落ちる段が地表に残るE-3, 4グリッド北辺に、3 m幅で長さ20m、さらにE-4 杭から東へは2 m幅で長さ5 mの第6 トレンチを設定した。これによって三堂のうちの北側にある薬師堂あるいはそのための地業面、それに堂前の池の西側汀線を把握しようとしたものである。

ところが発掘をはじめて地表から1 m掘り下げても地業面には当らず、トレンチ西端では深さ1 m30cmにおいて黒灰色の固く締った砂質土に達した。これは他のトレンチにおいて池底の地山と考えたものに等しく、第6 トレンチの東側の部分でもこの土層上面が地山に当たるものと考えられた。トレンチ中央部ではこの地山上に厚さ10~30cmほどの青灰色砂層がのっており、その中には多量の玉砂利が含まれていた。池の中にあたると思われていたトレンチ東端でも状況はほぼ同様で、現地表に高低の段差がある分だけ埋没深度は浅く、僅か70cmで地山に達している。

トレンチ北壁にかかり、E-3杭より東7m50cmほどの所では、地表下80cmほどのところで先述の玉砂利入り砂層に乗るようにして径70cmほどの礎石が見つかった。その周囲をさぐったところ、ほぼ同レベルで礎石の真南2mばかりの所に、4個の伊豆石が砂層にめり込むようにして検出された。これは礎石をのせていた根石と考えることも可能なように、4個の接する中央部が低くくぼんでいた。さらに礎石の東方には2個、根石状の石群の東方に3個の、砂層から地山まで掘り込んだ皿状の穴が検出された。それらの間隔は一定していないものの、あるいは何らかの建築物の礎石が抜きとられた痕と考えられないものでもない。しかしこのトレンチの範囲のみでは判断できない。

礎石とピット群から東方にかけては、地山上と砂層中に、大小の伊豆石、鎌倉石が十数個散乱したような状態で検出された。またE-4杭南西方に浅い地山の凸みも見られたが、いずれの場所にも苑池の西側汀線らしい遺構は検出されなかった。むしろ地山上に玉砂利混りの砂層がほぼ全面に見られるところからすると、第6トレンチ全体が池の中を掘っていたことになる可能性が強い。地山上面の標高は、トレンチ西端で19m30cm、東端で19m10cmほどを測る。地山上の玉砂利混り砂層の上面も19m30cmを越えない。

なお土層断面を検討したところ、第Ⅳ・Ⅴ層と第Ⅵ層の間には黒色砂粒のブロックが点在しており、これは宝永の富士火山灰ではないかと考えられる。その深さは現地地表下70~100cmにあり、この地が近世頃には湿田であり、しかもなお現地表に残る段差はその頃もあったようだ。

第6トレンチでは、地山上の砂層とその上面より、大量の瓦片が出土した。その中には火災で焼けたものも見られる。

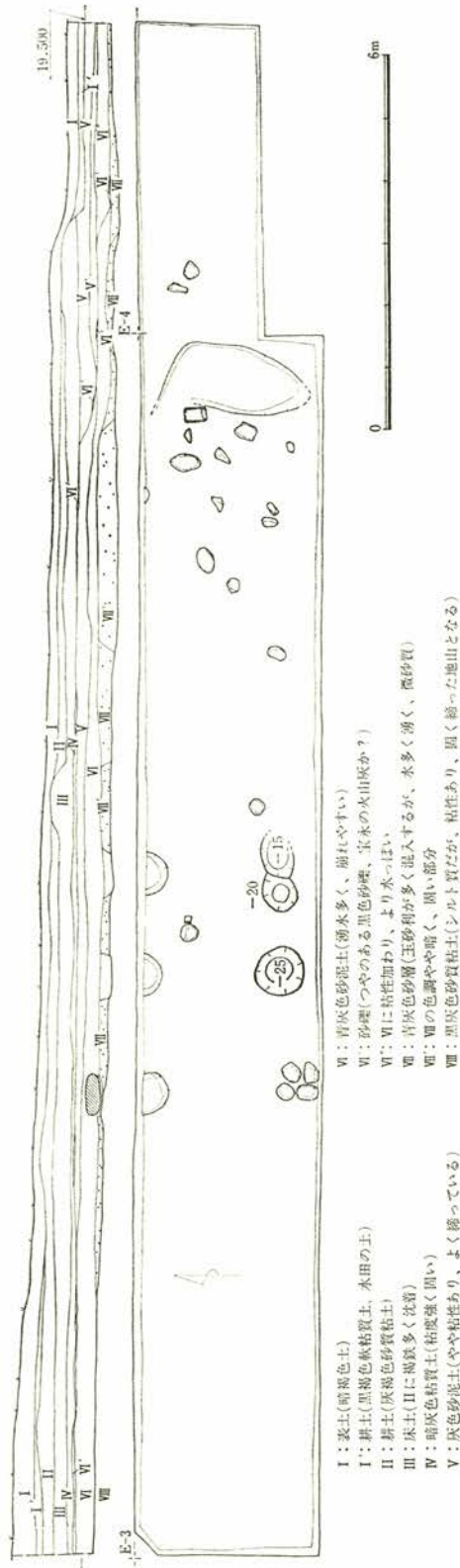


Fig. 8 第6トレンチ平面及び断面図

第4章 出土遺物

今回の試掘調査で出土した遺物は比較的少なく、段ボールみかん箱10個に満たない程度の量であった。そのほとんどは瓦片で第6トレンチよりの出土が目立ったが、第1、第5トレンチからも若干量が出土している。瓦以外には少量の陶磁器片と朱描画のある瓦片が出土している。

(1) 陶磁器

1. 磁器

Fig. 9-1は第5トレンチより出土した白磁碗の底部片である。素地は白色で、僅かに黒い微粒を交えるが粘りあり、高台は器を伏せて左回転させ削り出している。釉は灰色味のある半透明白色で、やや厚くぼつてりしているが、見込み部周囲は「蛇の目」状に釉を削り去っている。中国明代の白磁と考えられる。なお蛇の目部分には紅と思われる赤色物質がしみ込んでいる。化粧用紅皿として用いられたものであろう。

2. 陶器

Fig. 9-8は、第1Bトレンチ東端の傾斜版築層中より出土した、無釉の壺の胴下部片である。胎土はやや砂が多いが粉質で、器表も芯も灰色を呈している。焼成は還元炎によるものだが、あまり固く締ってはいない。器内面には輪積み成形時の継ぎ目と指の圧痕が、また器表面には回転などで整形痕が残る。底近く外面には縦に篋削りを施したような痕も観察できる。これは整形法に異質な点をもつが、渥美産のものと考えたい。

3. 土器

A; 瓦質手焙り

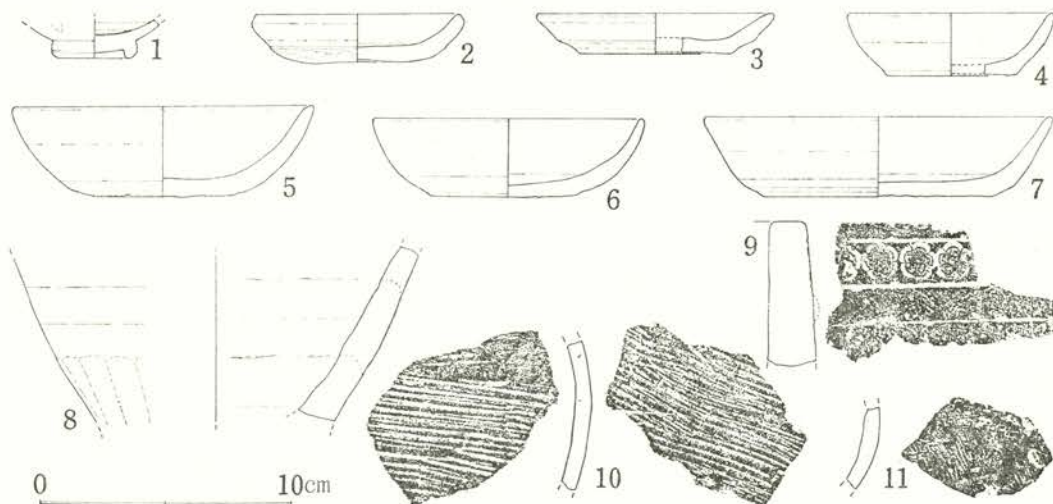


Fig. 9 出土遺物 (1) 陶磁器

Fig. 9—9は第6トレンチより出土したもので、水磨がやや進行している。砂と小石粒を多く含む胎土ではあるが、器表は滑らかに仕上げられている。口縁は直立し、二本の太い沈線間に五弁梅花のスタンプを押捺施文しており、その下の細い沈線との間には連珠貼付文が並べられていたものがすべて剝落してしまっている。全体に暗灰色を呈する。このような手焙りは鎌倉周辺の産品であろうが、梅花スタンプの類例は鎌倉では知られていない。

B; 土師質土器

Fig. 9—10, 11は第1Bトレンチ東端の、傾斜版築層中より出土した。10は内外面が褐色、胎芯が黒色を呈し、砂粒を多く含むが固く焼かれ、ササラ状工具による条痕が施されている。胎土・焼成・整形ともに鎌倉には類を見ないものであり、他地方より搬入された土鍋ではないかと思われる。

11はかわらけとよく似た胎土で肌色～橙褐色を呈し、軟質の土器で、外表に条痕が見られる。内面は粘土巻き上げの接合痕をザツとなでただけである。器外表には火熱による剝離も認められ、一種の土鍋と考えられるが、成形・整形からして前時代の土師器甕かもしれない(図示できなかったが、同層位より土師器片が1点出土している)。

C; かわらけ (Fig. 9—2~7)

Fig. 9—2は第6トレンチの地山上より出土した。胎土はあまり砂を含まず、器壁は厚い。底は丸底で手指圧痕を留める。内面と外面上半部はナデ整形が施され、口縁と底部の境界には稜が形成される。また口唇は斜めに断ち切るようになでつけられている。このような手捏ね成形で外面に稜を有するかわらけは、鎌倉では、鎌倉時代前半期のものと考えられている(註1)。

Fig. 9—3は第4Aトレンチより出土した。胎土には砂が多く含まれるが、焼成はかなり堅く、色調も橙褐色を呈する。ロクロ成形で器壁は外方へ開き、外側面には稜が残される。底は回転糸切り痕を留める。このかわらけは胎土・焼成・器形ともに、鎌倉では見られない種類のものであり、他地方よりの搬入品の可能性が強い(註2)。

Fig. 9—4~7はいずれも、第1A・Bトレンチの第1面を形成する地業層中より出土したもので、第1面が作られる過程で地業土中に混入したものであろう。いずれもロクロ成形、底は回転糸切りであるが、4・6が鎌倉市内では鎌倉時代後半～南北朝時代の層に普通見られるものであるのに対して、5は口唇が僅かに外方へ開く傾向が認められ、7では口縁部全体が外方へ開く傾向がある。このような口縁の外反傾向は室町時代のかかわらけに顕著であり、5・7を含む第1面の造成年代は南北朝時代より降る可能性が強い。

(註1) 鎌倉におけるかわらけの編年については、斎木秀雄「鎌倉出土のかかわらけ編年試案」鎌倉考古No.1, 1980年5月, がある。鶴岡八幡宮境内の調査でもこのタイプのかかわらけは最下層近くで出土している(鶴岡八幡宮発掘調査団編『鶴岡八幡宮——発掘の記録——』, 1980年10月)。

(註2) 鎌倉へは商品として瀬戸や常滑地方の産品が搬入されていることは明白だが、商

品としてではなく偶々持ち込まれるものもあるかもしれない。このかわらけもその産地をどこに求めるか、今後の課題であろう。

(2) 瓦 類

瓦はほとんどのトレンチで出土しているが、特に第6トレンチの地山上から全出土量の3分の2以上が出土した。今回の試掘で出土した瓦には、鏡瓦・宇瓦・男瓦・女瓦があるが、そのうち女瓦には文字瓦と戯画のある破片が含まれていた。いずれの瓦も破片ばかりで、全容を窺い得るものは皆無である。なお、本寺跡の既出資料については赤星直忠氏の著書^(註1)にあるので参照されたい。

A. 鏡 瓦

鏡瓦は小破片が6点出土した。瓦当文様により蓮花文系と巴文系の2種類に分けられる。

I類；八葉複弁蓮花文鏡瓦 (Fig. 10-1)

小片のため全形は窺い知れないが、同類のほぼ完形品が出土しているので参考にされたい^(註2)。それによると八葉複弁蓮花文で、中房には1+8の蓮子が置かれ、中房の外周に雄シベ状のものが表現されている。花卉は輪郭線によって表わし、その中に小さな円形の子葉を2個配している。内縁には珠文が密に巡っている。この種の瓦は全般に表面が薄墨色、芯部は緑がかった灰褐色を呈し、胎土は極めて良好だが、焼成はやや軟質である。同型式のものが、市内扇ヶ谷の泉ヶ谷の奥で採集されている^(註3)。また、鶴岡二十五坊跡^(註4)と名古屋市八事裏山1号窯^(註5)にみられる鏡瓦と、瓦当文様において同一の流れをくむものと考えられる。

II類；三巴文鏡瓦 (Fig. 10-2)

巴は左巻きで、頭部先端はやや尖らせ、胴部は太さが変わらないが、尾部は細く、末端は隣の巴の背に順次接して、界線のような効果を出している。珠文は密に約26個配されて、直立する周縁は幅広である。文様面に指頭圧痕を残す。男瓦との接合は外区内縁に相当する部分で深く行ない、内外面の接合粘土は厚い。色調は灰色を呈し、胎土は砂粒・小石を少量含むが良好で、焼成はやや硬質である。直径約16.6cmを計る。

B. 宇 瓦

宇瓦は出土点数11点で、瓦当文様によって唐草文系、劔頭文系、寺銘系とに大別されるが、さらに数種に細分が可能である。

I類 a；均正唐草文字宇瓦 (Fig. 10-3)

中心飾は中房状のものを置き、その周りにハート形をした4葉の花弁を十字に配し、さらに花文から少し離れて左右に唐草文を派生させている。顎部は、女瓦の広端部凸面に粘土を貼りつけて段顎としている。凹面は細かな布目痕を残し、瓦当部上端は1cm幅でヘラ削りされており、凸面には縄文の叩きが施されている。瓦当幅6.9cmを計り、顎部・頸部ともに横ナデが施されている。薄墨色を呈し胎土は良好であるが、焼成はやや軟質である。本例と類似した中心飾の瓦が、鶴岡八幡宮

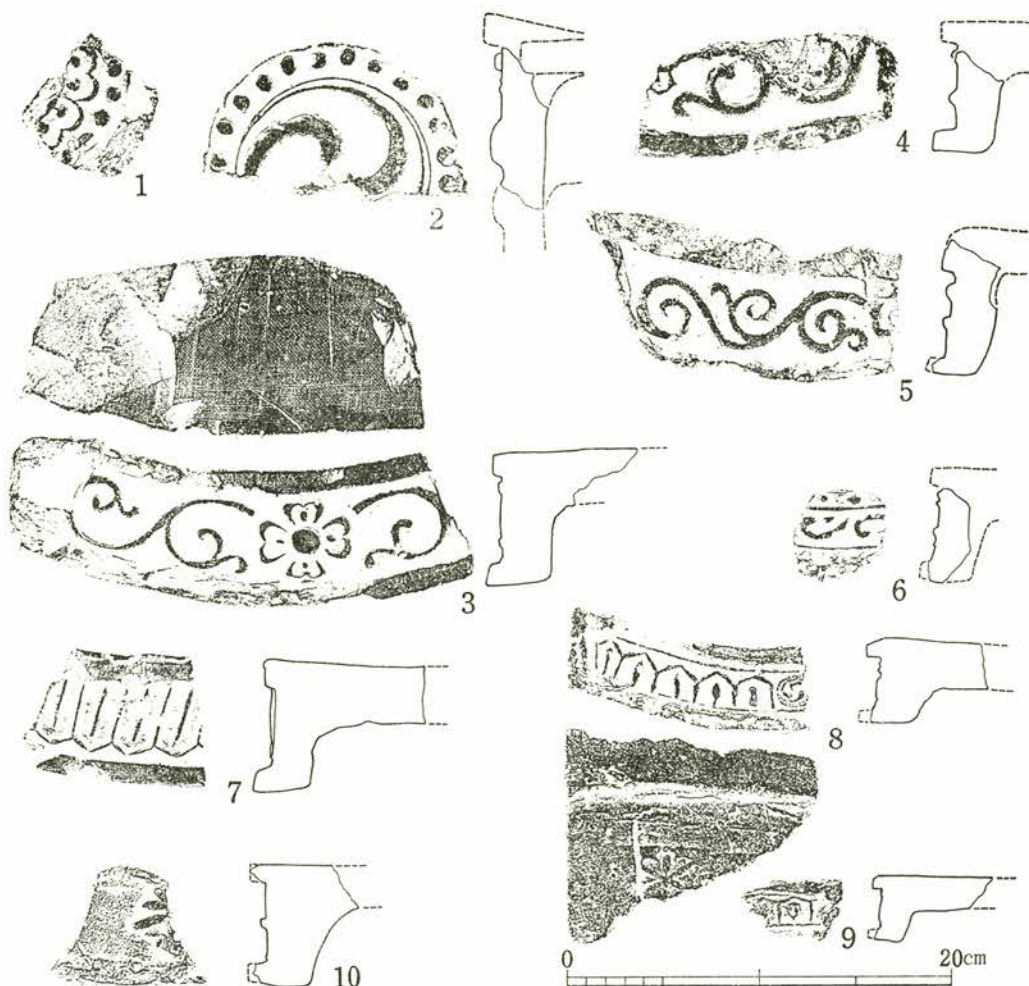


Fig. 10 出土遺物(2) 鏡瓦・宇瓦

より出土している(註6)。また、本例は各支葉が短かく、I類bのそれと類似していることから、いくつかの異範品(註7)があると考えられる。名古屋市八事裏山1号窯の出土宇瓦と瓦当文様が類似し、鏡・宇瓦の組合せで同一系譜文様にあたる(註8)ことを記しておく。

I類b；均正唐草文字宇瓦 (Fig. 10-4)

I類aと類似するが、中心飾の花弁が丸味をもち、花弁に接して唐草が二反転し、さらに先端に少し伸びる。瓦当面に砂粒が多く付着していることから、離れ砂を使用したものかもしれない。瓦当幅約6.7cmを計り、顎部・頸部ともに横ナデが施される。灰褐色を呈し、胎土は良好であるが、焼成はやや軟質である。類例は鶴岡八幡宮(註9)、勝長寿院跡(註10)などに見られるが、鶴岡八幡宮出土例は接合式であり、瓦当面に布目痕が顕著で、範離れに布を使用したものらしい。

II類；唐草文字宇瓦 (Fig. 10-5)

中央部が欠損していて顕著な中心飾は認められず、大きく唐草が三反転する。顎部には粘土のシワが見え、指頭圧痕が認められ、折り曲げ造りによる可能性もある。色調は表面が薄墨色、芯部は

茶灰色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。瓦当幅約7.1 cmを計る。

Ⅲ類；唐草文字瓦 (Fig. 10—6)

瓦当幅約5.8 cmを計り、内区には釣針状の唐草が反転し、内外区を界線によって分け、外区には珠文を配している。色調は表面灰褐色、芯部茶灰色を呈し、胎土に砂粒・小石を含み、焼成はやや甘い。

Ⅳ類；剣頭文字瓦 (Fig. 10—7)

太い明瞭な凸線による下向き剣頭文である。瓦当面および女瓦凹面に砂粒が付着し、凹面には布目痕をわずかに残す。瓦当面上端は0.5 cm幅でヘラ削りが施され、顎部・頸部ともに横ナデを行なう。瓦当幅6.8 cmを計り、色調は灰褐色、胎土は砂粒を含み、焼成は良好な部類である。

Ⅴ類；剣頭文字瓦 (Fig. 10—8)

中心に三巴文を置き、家形状をなす上向き剣頭文を連続して5個配し、界線は周縁に接するようになる。瓦当面および女瓦凹面には離れ砂の痕跡が顕著である。凸面には花菱文の叩き目痕が認められ、砂が多く付着している。類例は極楽寺旧境内^(註11)に見られる。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒・小石を含み、焼成は良好である。瓦当幅4.1 cmを計る。

Ⅵ類；剣頭文字瓦 (Fig. 10—9)

瓦当幅約3 cmで、凸細線の上向き剣頭文を連続して配している。界線は上下に周縁に接するように配す。瓦当面および女瓦凹面に離れ砂の痕跡が認められ、凸面にも砂が多く付着している。色調は灰白色、胎土に砂粒・小石を含み、焼成は良好な方である。類例は極楽寺旧境内^(註12)、称名寺^(註13)、鶴岡八幡宮^(註14)等に見られる。

Ⅶ類；寺銘文字瓦 (Fig. 10—10)

瓦当幅約6.2 cmを計り、太い陽刻で「寺」の文字が捺し出されている。瓦当面には砂の痕が顕著である。顎部はヘラ整形され、顎部は横ナデを施す。女瓦部の厚さ2.4 cmで灰色を呈し、胎土に砂粒・小石を含み、焼成は硬質である。これまでに採集されている「永福寺」銘の宇瓦には2タイプが知られている^(註15)。その一つは左から永福寺と太い陽刻で記され、もう一つは右から細い凸線によって記されるものである。本例は前者の寺銘宇瓦に相当しよう。

C. 男 瓦 (Fig. 11—5, 6)

男瓦も小片ばかりで全形を知り得るものは存在しない。有段式の所謂玉縁付きのものばかりであり、凹面には布目痕を有し、凸面は縄目叩き痕がみられるが、大部分はヘラ削りと縦ナデによって調整されている。

男瓦には、胎土が良好で焼成がやや甘い一群と、胎土は悪いが焼成の良好な一群とに、大きく分けられる。

D. 女 瓦 (Fig. 11—1~4)

造瓦法は凸型台による粘土板一枚作りである。凸面の叩き目痕は、縄目文、斜格子文(大)を持つものが多く出土した。それ以外に、三鱗文と花菱文を組合せとした特殊な文様 (Fig. 11—2) も

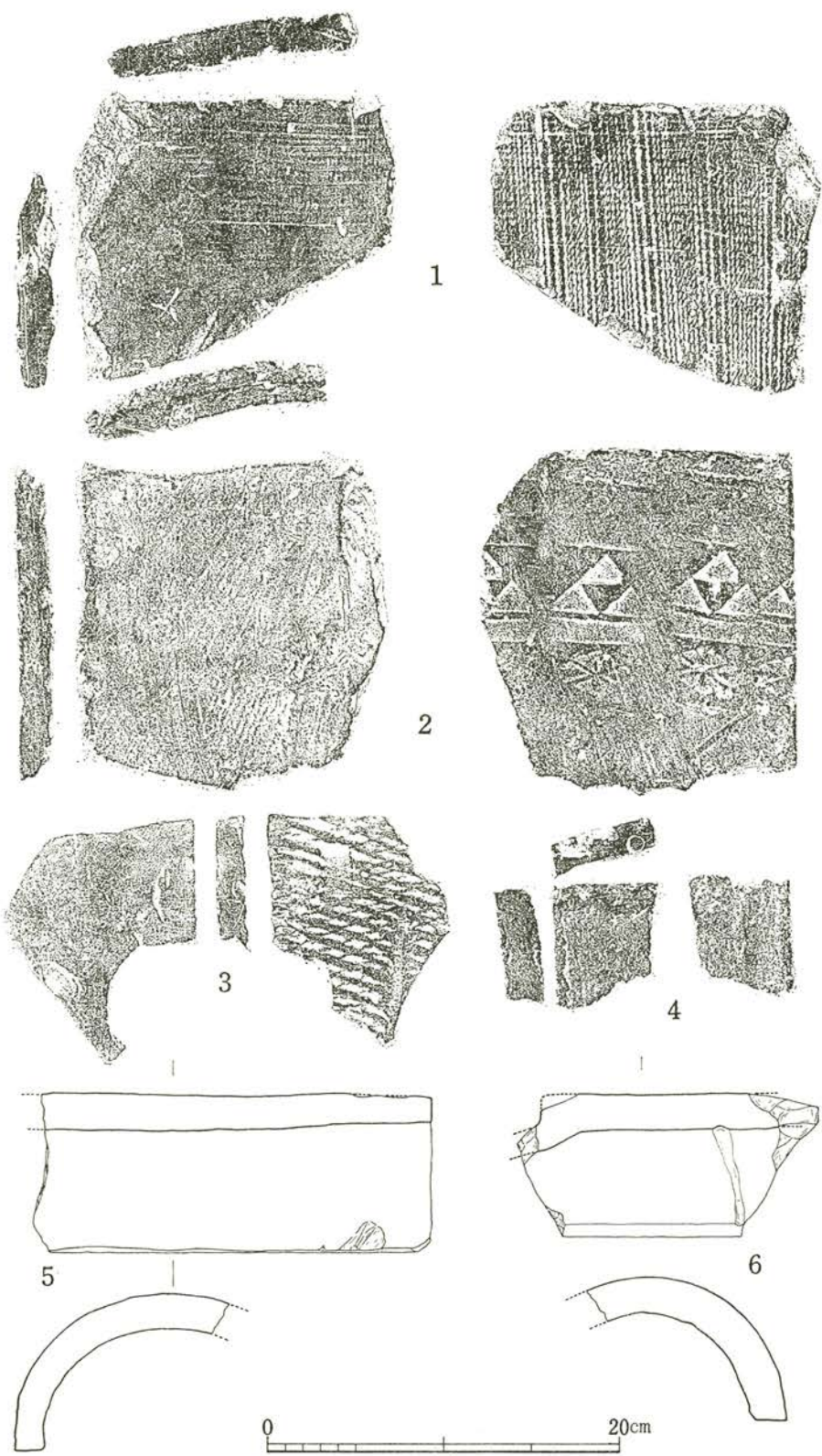


Fig. 11 出土遺物(3) 男瓦・女瓦

認められた^(註16)。またFig.11—4に示したように、端面に直径1cm程の竹管文が捺されたものが1点出土した^(註17)。これらは凹面に布目痕を有するものや砂が多く附着するものなどあり、時期的な差が考えられるのではなかろうか。以下その特徴を記しておく。

- ①布目痕を有するもので、凸型台に布を敷き、はぎとった粘土板をのせプレスする従来の方法による。
- ②離れ砂と布を併用したもので、凸型台に布を敷き、さらに砂を撒いて粘土板をのせてプレスする方法。
- ③離れ砂だけを使用したと思われるもので、凸型台に砂を丁寧散布して粘土板をのせ、さらに凸面にも砂を散布した後、プレスする方法である。

E. 文字スタンプのある瓦 (Fig.12—1, 2)

1は文字瓦で、女瓦凹面に縦7cm、横3.8cmの長方形のスタンプによって「永福寺」の文字を捺している^(註18)。灰白色を呈し、胎土に砂粒・小石を含み、焼成良好である。第2トレンチより出土したものであるが、同様の枠部分の一部のみ残す破片が1点、第6トレンチからも出土している。

2は多くの部分を欠く小破片で、女瓦凹面に現状で「文曆」と考えられるスタンプが捺されている。第6トレンチより出土したもので、他に1点スタンプのほぼ全形を残すが剥落の著しいものが同トレンチより出土している。これらは「文曆二年、永福寺」という銘であったろうことが類例から推察できる。同類のスタンプを持った瓦が長勝寺遺跡^(註19)や泉ヶ谷の奥で発見されている^(註20)。色調、胎土、焼成とも1に類似する。

〔表1〕 軒瓦類別出土一覧

トレンチ	鑑瓦				字瓦							小計	
	I	II	不明	小計	I a	I b	II	III	IV	V	VI		VII
1Bトレンチ			1	1	2	1				1			4
1C "		1		1									0
5 "		2		2			1			1			2
6 "	1		1	2	1			1	1		1	1	5
合計	1	3	2	6	3	1	1	1	2	1	1	1	11

※類別

- 鑑瓦
 - I類 蓮花文系
 - II類 巴文系
- 字瓦
 - I～III類 唐草文系
 - IV～VI類 剣頭文系
 - VII類 寺銘系

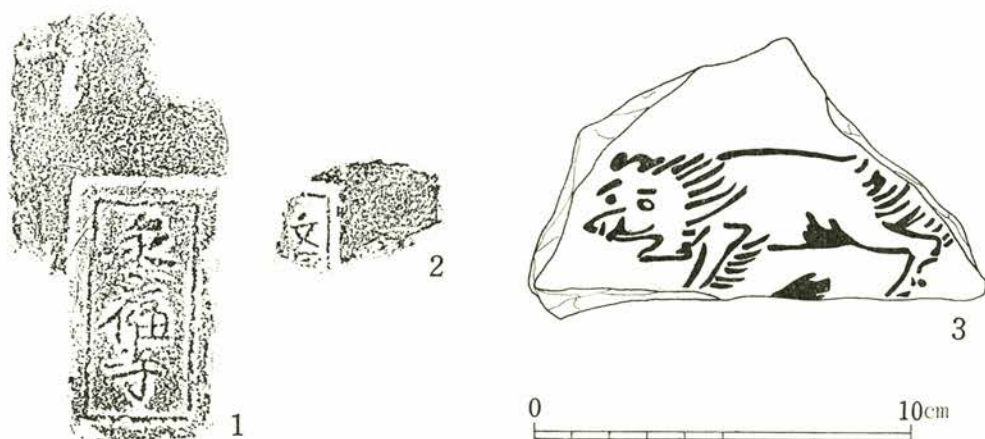


Fig. 12 出土遺物（４）文字瓦・戯画のある瓦片

（３）動物戯画のある瓦片

Fig.12—3は戯画の描かれた女瓦片で、現状で長さ12.2cm、最大幅6.8cm、厚さ1.8cmを計り、略三角形をしている。戯画は凸面に朱によって描かれており、凸面にある瓦プレスの縄目を無視して大胆に朱筆を走らせている。画題は犬または猪のような動物であるが、口辺に牙のようなものが見られるところから、猪と考えたい。足は前後ともに1本ずつの表現であるが、関節部の描き方には手慣れた感じがうかがえる。頭部・脚の後方には毛がなびくさまが大ざっぱに描かれる。顔面には尖った鼻と牙、あけた口、眉と目が描かれているが、これはリアルなものではなく、眉などは擬人的ですらある。

この絵の動物の前足と、腿の毛先が欠けていることから、描画のなされた瓦はもう少し大きなものであったと考えられる。しかし寺院の屋根瓦に、裏面とはいえ戯画を描くということ是不自然で、むしろ瓦片に落書きしたものが土に混じったと考えておきたい。出土したのは第1Bトレンチ東端の傾斜版築層中であり、時代はこの版築層形成以前すなわち鎌倉時代を降らないものであろう。

さてこの絵の意味であるが、戯画の描かれる動機など後世の我々にとっては窺い知ることもできない。ただ、鎌倉武士が武技鍛練を兼ねた狩りをよく行ない、鹿とならんで猪も重要な狩猟対象で身近なものであったろうことは、「吾妻鏡」などから知れる。このような動物戯画が瓦・磚に描かれた類例は、全国的にも出土例は少なく、武蔵国分寺跡より女瓦凹部に男瓦凸面にへら描きされた馬の絵^(註21)が、秋田城跡から龍の墨書磚^(註22)が出土しているくらいである。また猪が刻まれた土器片の例として、愛知県鳴海古窯出土品^(註23)が知られている。中世の動物戯画瓦となると本例以外には管見に触れていないが、卑近な例として滑石鍋の破片に牡鹿が線刻されたものが、鎌倉の若宮大路際の教育文化施設建設予定地内遺跡より出土している^(註24)のが挙げられる。いずれにしても、本例はきわめて貴重なものといえよう。

- (註1) 赤星直忠「永福寺址の研究」、『中世考古学の研究』有隣堂、昭和55年所収。鏡・宇瓦の一部として図4、5(P. 44, 45)に紹介されている。
- (註2) 註1文献の図4-1(P. 44)。
- (註3) 赤星直忠「鎌倉だより(四)」、『考古学雑誌』第18巻1号、昭和3年。
- (註4) 原広志「鶴岡二十五坊跡出土の鏡瓦について」、『鎌倉考古』No.11、昭和57年。
- (註5) 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯発掘調査報告」、『古代人』38、昭和56年。
- (註6) 鶴岡八幡宮発掘調査団『鶴岡八幡宮——発掘の記録——』、昭和55年。図18-7(P. 38)。
- (註7) 註1文献、図5-10。
- (註8) 註5文献。瓦当文様は類似するが、胎土・焼成・色調は異っている。
- (註9) 註6文献。図18-6(P. 38)。
- (註10) 原広志「勝長寿院跡出土の古瓦について」、『鎌倉考古』No.6、昭和56年。
- (註11) 極楽寺旧境内遺跡発掘調査団『極楽寺旧境内遺跡』、昭和55年にみられるが、女瓦凸面叩き目痕などにやや違いが認められる。また新宮跡(赤星直忠「鎌倉新宮跡発見の古瓦」、『考古学雑誌』第20巻5号、昭和5年)にもみられるが、剣頭文や界線の有無などに違いがある。
- (註12) 註11に同じ。
- (註13) 吉田章一郎他「史跡称名寺発掘調査概報(第2次)」、『横浜市埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』、昭和48年。
- (註14) 註6に同じ。
- (註15) 註1文献の図5-11, 12(P. 45)。
- (註16) 三鱗文、花菱文が組合わさった例は、鶴岡八幡宮(註6)、極楽寺(註11)、称名寺(註13)にみられる。
- (註17) 極楽寺(註11)に出土している。
- (註18) 赤星直忠「鎌倉だより(一)」、『考古学雑誌』第16巻7号、大正15年、にこのスタイルのものがみられる。
- (註19) 長勝寺遺跡発掘調査団『長勝寺遺跡』、昭和53年。
- (註20) 鎌倉国宝館『鎌倉の中世出土遺品——鎌倉国宝館図録第18集』、昭和46年。
- (註21) 大川清『かわらの美』(現代教養文庫566)、昭和41年。
- (註22) 秋田市教育委員会『秋田城跡——昭和53年度秋田城跡発掘調査概報』、昭和54年。
- (註23) 水野正好「戯画」、『古代史発掘』10、昭和49年。
- (註24) 斉木秀雄「動物戯画のある滑石片」、『鎌倉考古』No.6、昭和56年。

第5章 問題点の整理

今回の試掘では僅かな面積しか発掘し得なかったため、永福寺の全体像を語ることなど到底及ばないが、今後当地になされる環境整備事業に向けて問題となる点を整理しておきたい。

(1) 塔跡推定地について

第1トレンチを入れた塔跡推定地の台状平坦部は、発掘の結果、

- ①現在ある方形台状部は、やや降った時代に付け加えられたもので、顕著な建造物遺構は存在しないと考えられる。
- ②台状地南部に検出された傾斜版築層は古いものではあるが、出土瓦からして、創建時からあったものではなく、またその性格もわからない。

という二点が明らかとなった。とくに②に関してはその上面が耕作かそれ以前に削平されてしまっていることで、とくに困難である。しかし全体として表土は僅か20cmほどが覆っているにすぎないため、今後の調査で広い範囲を調べれば傾斜版築層の平面的広がりが見つかると思われる。そのさいに、これだけ整った地形を残す遺構（台状部分）の性格も把握されねばならないし、比高5mもある台地斜面をどう保護し、どの時代の遺構を保存・整備してゆくかが検討されねばなるまい。

(2) 苑池について

今回の試掘によって、苑池の北岸、東岸、釣殿前面の限界はつかみ得た。しかし三堂前面については、第6トレンチ全体が池の中に入ってしまうらしく、池の西岸はつかみ得なかった。赤星氏の研究によっても、三堂北方の池汀線はやや西に偏するようであり、さらに曲水の存在が予想されるとすれば問題はより複雑となる。

今回つかみ得た池底の標高を、北から順に模式的に並べてみたのがFig.13である。第4、第5ト

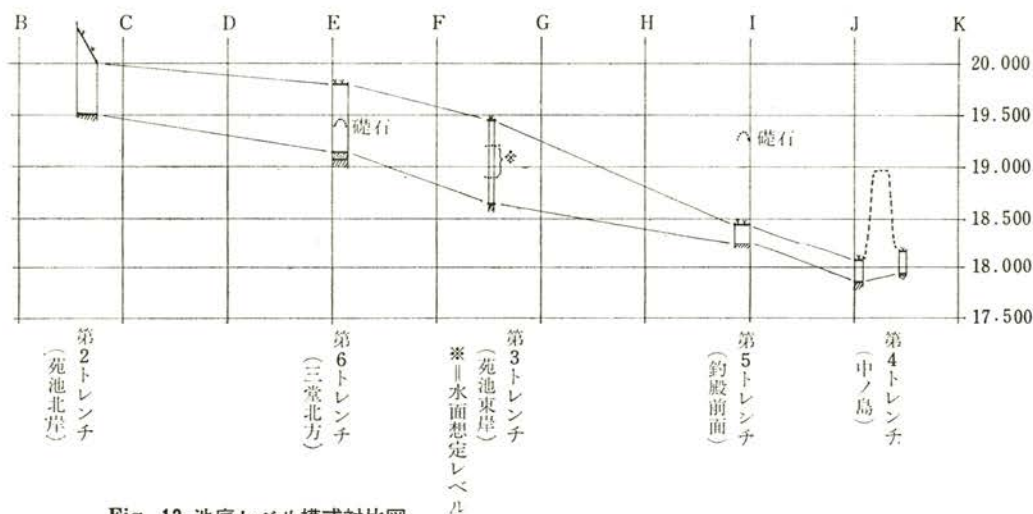


Fig. 13 池底レベル模式対比図

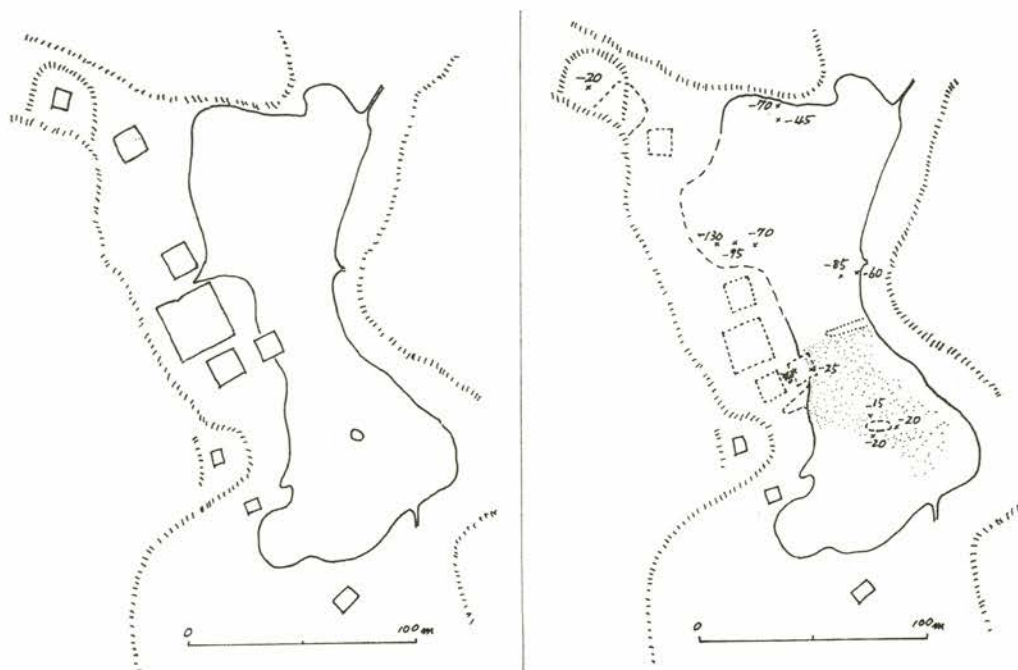
レンチ検出の池底は、昭和初期の土取りで低められたかもしれないが、玉砂利が残されていることから、発掘によって得られた数値をそのまま使用した。また池汀の水面レベルの想像できるのは第3トレンチに見られた段差のみであった。この結果、最北の第2トレンチと中ノ島周辺とでは、池底レベルに1m50cmもの差があることがわかった。もし最北岸まで水に浸ったとすると、現状の中ノ島は完全に水没するし、第5・6トレンチ検出の礎石も水没するということになってしまう。水位レベルが第3トレンチの段差(標高18m90cm~19m20cm)あたりとしても、やはり中ノ島は危うい。

このことからすると“堂前の池”は一つの広大なものではなく、段差を有する水路でつながれたいくつかの池に分かれていたのではないか、あるいは現状の平地のもっと中央に池が縮小されるのではないかと考えた方が妥当に思われる。しかし第2トレンチ、第6トレンチの状況からすると、より前者を支持したいところである。

いずれにしても、さらに数多くのトレンチを発掘し、苑池の平面プランと確実な水位レベルをおさえてみないことには、答は出ないであろう。環境整備事業にあたっては、もう少し予備知識を得るための試掘が必要と思われる(そのためには、今回の試掘でも苦労したことだが、湧水の処理ひいては遺構存在地全体の排水についての配慮がなされねばなるまい)。

(3) 建築遺構について

今次試掘では確実な建築遺構の検出は見られなかったが、第6トレンチと第5トレンチに検出さ



〈従来の伽藍配置推定図〉

〈今次試掘調査より〉

マイナス数字はその地点の埋没深度
破線は推定地の修正、ドット部分は削平地

Fig. 14 遺構推定地と埋没深度

れた礎石は建築遺構の存在を予想させるに十分なものである。ただその方向性・規模などは、昭和28年の赤星氏の調査と一致するものとは言い切れない。釣殿跡推定地のトレンチ東方水田中の礎石群も、多くは原位置を動かされてしまったものと考えられるし、旧畑面より50~70cm下にあるという永福寺堂址の地業面も第6トレンチには存在しなかった。一方第5トレンチにおいては地表下40~50cmに礎石をのせる地業面があることから、これら地業面の深さと範囲をおさえるための、さらなる試掘が必要と考えられるのである。

さらに、永福寺の修造に関する文献記事が遺されているのに対し、今次試掘では時代の異なる瓦が同一の層（池底堆積であるが）から出土しており、釣殿推定地の地業層も積み重ねが行なわれたとは考えにくいものがある。遺構は時代の新旧を問わず慎重に扱わねばならないとしても、層位関係を明らかにする試掘も行なわれねばなるまい（赤星氏の従前の調査からしても、地業層が何枚も重なるという期待は殆どないが）。

(4) 環境整備に向けて

永福寺跡を保存しその環境整備を行なうにあたっては、さまざまな方法が考えられるであろうが、当寺のもつ庭園とくに苑池の復原整備は欠かすことができないのではなかろうか。今次試掘でもそのための苑池汀線の確認と池底までの埋没深度確認とに重点を置いた。その結果はFig.14のごとくになるが、先述したように池の範囲（汀線の位置）や池の構造に新たな疑問が湧くわけで、性急な「整備」はかえって遺構を損う恐れなしとしない。少なくとも、現在平坦地中央南部に残る土堤状部（これは昭和初期の土取りの限界に残土を積んだものという）より南方、すなわち中ノ島周辺は僅か15~20cmで池底に達するため、現状の植生の変更さえ慎重にしなければなるまい。一方、土堤状部より北方では池底は地表下70cm程度に埋没しており、西方山裾近くでは1mを超えるので、復原整備を行なうには大量の排土という問題を伴う。

塔跡や三堂跡などについては、今次調査からは従来の予想に反する新しい疑問が出るばかりで、復原整備を考えるための資料としては、いかにも不十分としか言えない。

結 語

今回の試掘調査は、史跡の整備を前提としてその計画策定のための資料を得ることを目的としていたので、通常の学術調査とは異なった方法をとらざるをえなかった。つまり、発掘によって検出された最上の遺構面のみを調査するという方法である。そのため、第一面に達するまでの層序については知ることができるが、遺構面の枚数や各面相互の層位的な関係を知ることができない。従って当調査によって確認された遺構群の年代を決定することは、出土した遺物の量が少なかったこととも相まって不可能に近い。ただ幸いなことに各遺構面の上層に宝永年間の富士山の噴火によって飛来し堆積した宝永火山灰層があり、これら遺構群が中世にまで遡りうることはほぼ確実としてよいのではないかと思う。

また今回の調査では広大な遺跡地内の遺構分布を知るために、分散して小発掘区を設定し、それなりの分布状態を知ることができたが、これら遺構の相互の関連の把握は困難であった。最上遺構面のみを調査するという動かし難い大前提のもとでの発掘調査では、発掘区の分散は得策ではないように思う。特に整備を目的としているこの事業の一部として実施される本遺跡の調査は段階的にまとまった面積を広く調査すべきではなかろうか。また今回の調査では釣殿址をはじめとするいくつかの遺構が確認される一方、従来推定されていた池汀線を明瞭に検出できないという新たな問題点も投げかけられた。今後の事業推進に係る大きな問題としてうけとめている。次回以後の発掘調査で鋭意明らかにしていかなければならないと思われるが、湧水の処理その他事前に解決すべき土木学的課題も多く横たわっている。

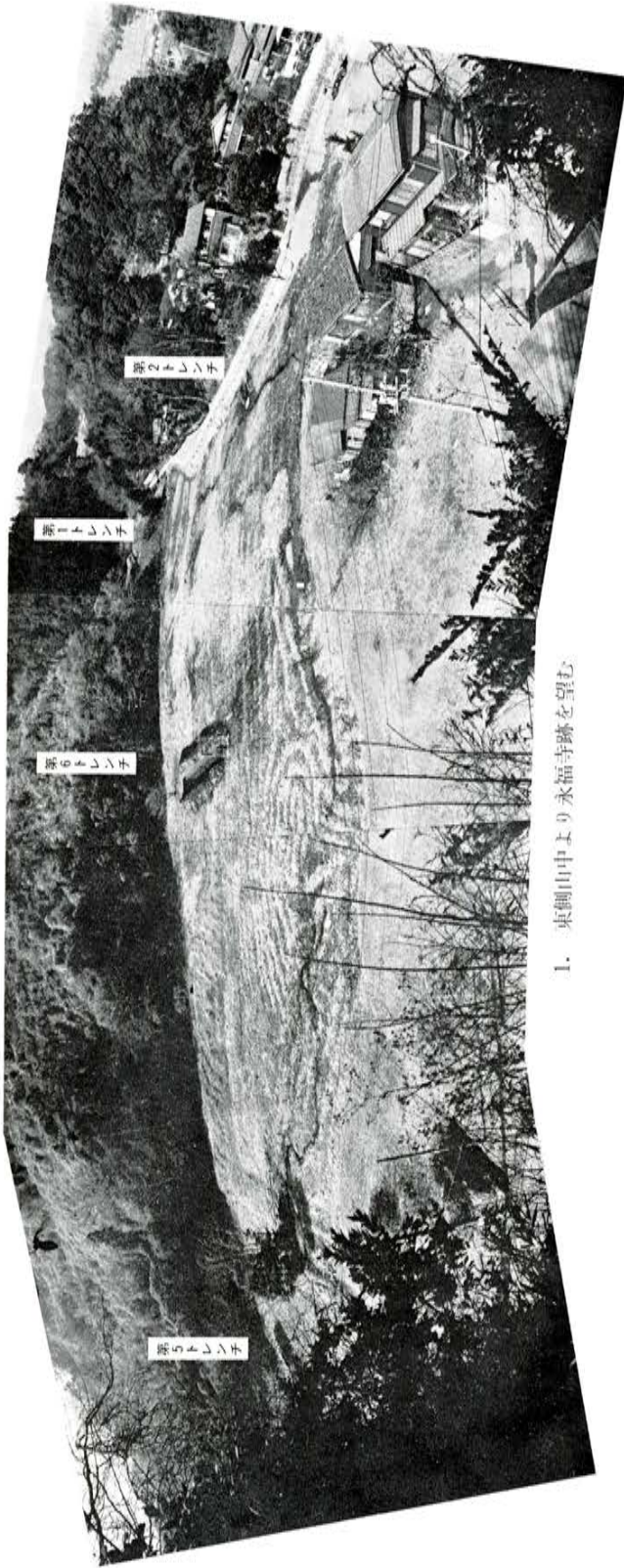
以上、提起された諸問題に対して各方面から検討を加え、さらに次年度については三堂の遺構の範囲および池汀線との関連等を具体的に把握すべき継続的な試掘調査の実施が必要と考えられる。

史跡永福寺跡整備計画準備委員会委員名簿

庭園	吉川	需	日本大学教授・文化財保護審議会専門委員
建築	大岡	実	文化財保護審議会第二専門調査会会長
〃	鈴木	亘	文化学院講師
文書	貫	達人	青山学院大学教授
考古	赤星	直忠	市文化財専門委員
〃	大三輪	龍彦	鶴見大学助教授

(事務局)

文化庁	牛川	喜幸	文化庁文化財保護部記念物課主任調査官
県	相馬	孝昭	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課主査
市	清水	芳明	鎌倉市教育委員会社会教育部長
	増田	庄司	同社会教育部文化財保護課長



1. 東側山中より永福寺跡を望む



2. 第1Bトレンチ地業層中出土の字瓦
(第1面地業層中に敷き込まれ裏返しで出土。
下方に瓦当面の瓦痕が土に残る。)



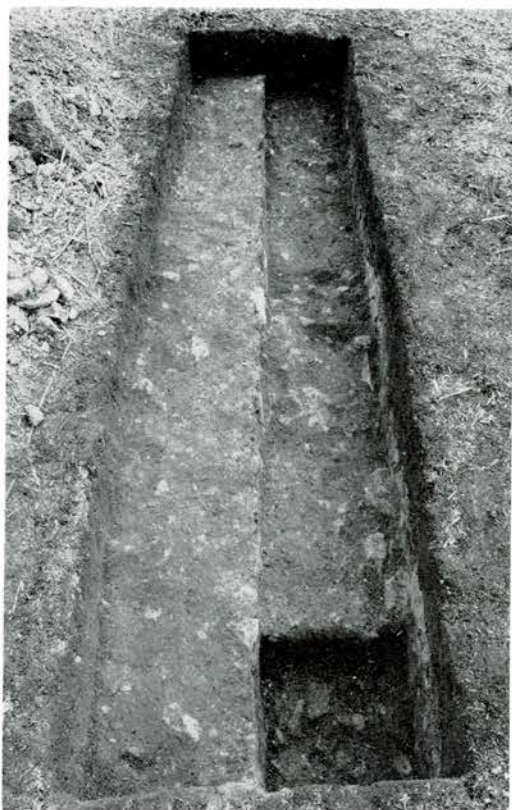
1. 第1A・Bトレンチ第1面
(東方より)



2. 第1Cトレンチ第1面(東方より)

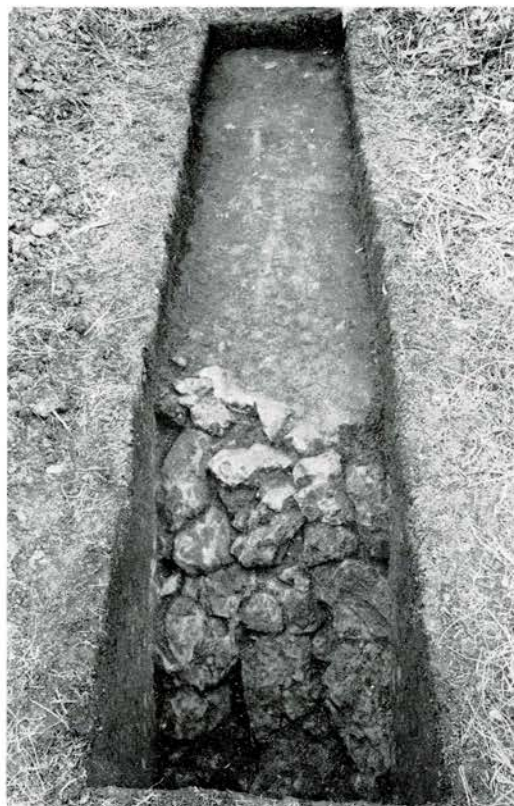
3. 第1Bトレンチ東端傾斜版築層(北方より)





1. 第1Dトレンチ（東方より）

（左側は第1面まで、右側はその下層まで掘り下げた状態。向う側の土丹の細かい部分が傾斜版築層になる。）



2. 第1Eトレンチ（西方より）

（傾斜版築層の表面にあたる斜面に土丹塊が貼りつけられた状態がよくわかる。）

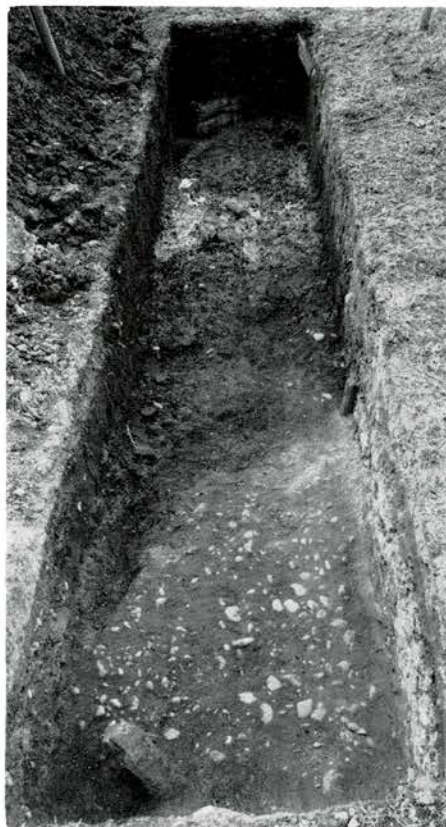
3. 第1Eトレンチ（南方より）（上面は耕作により削平されているが、版築層の傾斜がわかる。）





1. 第2トレンチ（南方より）
（玉砂利の散る面。向こう側に）
安山岩が据えられている。

2. 第3トレンチ（東方より）
（玉砂利ののる地業面は西方へと傾斜し、池底に石が据えられている。）





1. 第4A・Bトレンチ（南方より）中ノ島の上部は近世に削平されたことがわかった。



2. 第4Cトレンチ（東方より）中ノ島の周囲を囲む巨岩の一つが立っている。



1. 第5トレンチ（東方より）

（手前側の玉石は近代に積み直された可能性がある。釣殿の陸上部分は玉砂利をのせる地業面になっていた。）

2. 第5トレンチ（北方より）

（地業面上に2個の礎石が検出された。礎石の表面は火災のためか剝離している。）



1. 第6トレンチ全景（東方より）



2. 第6トレンチ中央部に検出された礎石、
根石、抜きとり穴（西方より）



3. 第6トレンチ北壁の土層断面
（かなり深い位置に火山灰（宝永か？）
の推積が見られた。）





〔出土遺物〕 1~4: 宇瓦, 5・6: 鏡瓦, 7: 女瓦 (竹管文), 8: 文字瓦, 9: 戲画瓦

鎌倉市二階堂

史 跡 永 福 寺 跡

国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る試掘調査報告書

— 昭和 56 年度 —

発行日 昭和 57 年 2 月 28 日
編 集 史跡永福寺跡試掘調査団
発 行 鎌倉市教育委員会
印 刷 中川印刷株式会社
